

入学者のことば

歯学部に入學して

歯学科1年 瀧口知彌



奇縁である。とにかくその言葉に尽きる。

入試で訪れたのを最後にもう二度と踏むことも無いだろうと思っていたこの地に再びこのような形で戻ってくるなど当人を含めた一族郎党誰もが夢にも思っていなかった。

だから追加合格の発表の日であったにもかかわらず（正確には全く知らなかったのだ）、朝一でポウリングに出掛けてそこで合格の通知を受けた事を今でも覚えている。

とにかく補欠合格と言うのもなかなか難儀な物でその当事者にはなかなか合格したことに対する実感とその余韻を与えてくれない。電話が来たと思ったら、即座に書類を用意して、ホテルを確保して（北越の切符はあまり焦る必要が無いのだ）、一路新潟に向かい入学手続き。その後、宿（この場合はアパートと言うべきだろうか）を探したり、生活に必要な物を調達したり、引っ越しの準備をしたり、…とほっと息の着く間も無く入学式。気がつけば前期の試験もどこへやら。そうこうしているうちに夏休みになり、この原稿の締め切りもとうの昔に過ぎてしまった（担当の方、申し訳ない。この場を借りてお詫び申し上げます）。

つくづく補欠合格なんてするものではないと思う。もっとも狙ってできる物でもないのだが…。

別に補欠合格のせいだけではないと思うが最近月日が経つのが速く感じるようになった。古人曰く「少年老い易く学成り難し」とはよく言った物である。

歯学科の六年と言う月日は他の学部比べて一見遙かに長いものであるかのように思えるが実際

にはあっという間に過ぎて行くかもしれないし、多分過ぎて行くのであろう。

ぐずぐずしているとあっという間に置いて行かれてしまうのであろうから、絶えず精進していかなければならない事は言うまでもないことである。解剖とか、解剖とか、解剖とか、解剖とか…、克服すべき課題は多く極めて困難なものばかりである。しかしながらそれらの課題を乗り越えられるよう日々努力していきたいと思う。

入学して

歯学科1年 柴田陽子



大学に入ったら、何か新しいことを始めてみようと思っていました。具体的に何と決まっていたわけではなく、ただ漠然と、今までとは一味違う何か、をしてみようと思っていました。

そして、始めてみたのが、バドミントン部でした。

何だ、ふつうじゃんと思われるかもしれませんが、これは、私にとっては革命的なことなのです。実際、中学や高校の友達に「あたし、バド部はいつたんだー」というと、「え？ まじ!? 想像できんー」とか、「しばたが？ 似合わねー」とか言われます。中学、高校と、一時バレー部のマネージャーをしていたことがありますが、後は常に美術部か帰宅部でした。それも、美術部と言っても幽霊部員でしたので、ほとんど部活らしい部活の経験は皆無なのです。ちなみに、ここで云う部活らしい部活とは爽やかな汗を流す運動系の部活のことを指します。

そんなわけで今まで、先輩、後輩との付き合いと云うのもまるで経験してきませんでした。当然

始めは、多少戸惑い、不安なところもありましたが、この部活に入ってよかったと今は思っています。今これを書いているのが丁度八月中旬で、デンタル後なのですが、デンタルでは、様々な意味で良い経験をさせてもらいました。色々な人に感謝したいと思います。ありがとうございました。

さて、私は運動経験がない上に運動神経も薄く、とろくさいのでバドミントン自体はかなりへたです。デンタルのシングルスに出ましたが、相手とキャラがかぶり、二人して挙動不振プレーでした。その上負けました。最初から勝つことは諦めていたものの、時間が経つにつれて悔しく思うようになりました。入部後、本当に勝ちたいと思ったこと、強くなりたいと思ったことはなかったのですが、今回強く思いました。強くなるうって。

大学入学後、また新たな目標が一つできました。目標は達成されるためにあり、その達成に向けての努力に大いに意義があると思います。基本的に多方面でふにゃふにゃの私ですが、がんばりたいと思います。一年後のデンタルが楽しみです。

口腔生命福祉学科に入学して

口腔生命福祉学科1年 菅田美希



口腔生命福祉学科に入学して、早くも4ヶ月になろうとしています。この口腔生命福祉学科は、今年設立されたばかりの新しい学科ということで、最初の頃は新しい分野の取り組みに対する期待とともに不安もありました。自分が一期生になるということは、どこことなく誇らしく思う反面、先輩がおらず前例も何もないまま将来に何が待っているのか分からない上に、自分たちの選択した道がそのまま後輩に影響を与えるのだというプレッシャーもあります。

しかし、今ではそのような不安も少しは解消されました。それは、親しみやすい先生方のおかげです。私は高校生のとき、大学の教授というのはもっと怖い人ばかりだと思っていました。けれど

も、口腔生命福祉学科の先生方は私たちに気軽に話しかけ、相談に乗ったりもしてくれる優しい人ばかりでした。私たちのことを気かけながら、一緒に新しい学科を盛り上げていこうという先生方の姿勢は私たちに安心感を与えてくれます。また新設学科記念講演会では、現在福祉や医療の分野でどのようなことが求められているのかを示唆するような、私たちの将来に直接関わってくる話を聞き、モチベーションを高めることができました。

将来への不安はまだいっぱいあります。しかし、同じだけ期待と希望があります。そして、この不安こそが一期生の醍醐味であり、不安あつてこそ期待や希望だとも思います。

今はまだ教養課程で専門分野の学習はこれからです。一日でも早く現場に出て立派な医療人として働けるよう、これからもがんばっていきたくです。

口腔生命福祉学科に入学して

口腔生命福祉学科1年 星野祐一郎



口腔生命福祉学科。この類の学科は新潟大学と東京医科歯科大学の口腔保健学科の二つ、全国でわずか二つしかない。

どちらに進学しようか迷っていたが、家庭の経済事情と己の一人暮らし適応能力などを考慮して新潟大学に入学願書を出し、幸運なことに合格し、入学することになった。

パンフレットなどで大筋の教育方針・理念、取得可能な資格などは把握していたのだが、新設学科だけあって先輩や友人がいるわけではないので十分な情報がなく、具体的なことはあまりわからないまま大きな不安と期待の中入学式に臨むことになった。

入学式当日この学科について説明会があり、そこで口腔生命福祉学科誕生の経緯、歯科医師と歯科衛生士の業務内容・範囲の違い、歯学部だけで

なく医学部との連携関係、社会福祉士の業務内容についてなどスライドを用い時間をかけて丁寧に詳しく新潟大学歯学部口腔生命福祉学科を教えてくださいました。

すばらしい！ここにきて正解だった。と思った瞬間私は再び不安に駆り立てられた。

なんと	福祉学講座	教授	未定
	福祉援助講座	教授	未定
	口腔衛生支援学講座	教授	未定

なのである。さすがにこれには参ったが、これらの講座は二年次以降の講座であるので来年までにはなんとか決定されていることを期待している。

前期授業が始まり、一年次は月曜日から木曜日は教養科目で五十嵐キャンパスへ授業を受けにしているため旭町キャンパスの歯学部棟に入るのはまだ週に一日だけ。それ故、いまだ歯学部に入学した実感はあまりないが、金曜日の午前中にある早期臨床実習では実際に患者さんに接し、会話をさせていただいたり、患者役実習として6年生に治療されてみたり、さまざまな診療室へ行きその施設・設備・治療見学・教授との会話（これが一番ためになる）などをさせていただくにつれ、なんとかこの私でさえも医療人としての自覚を持ち始めています。

これから口腔生命福祉学科20人と先生方と共に4年間頑張っていきたいと思います。

大学院に進学して

歯周診断・再建学分野 梶田 桂子



「あと4年も学生する気なの？」両親の半ばあきらめに似た視線にうしろめたさを感じながらも大学院に進学してはやくも4ヶ月が経ちました。入学当初は、医局の中に居場所がないように感じたりもしましたが、今では研究室の席にどっしりと腰をすえています。

さて、肝心の研究ですが、これまた学生時代とは勝手の違うことばかりではじめは戸惑いまし

た。それでも、マイクロピペットの使い方から先輩方に教えていただき、今では電気泳動やPCR、細胞分離・培養など一人で任せてもらえる実験が少しずつですが増えてきました。順調に増えていく細胞を、毎日ワクワクしながら顕微鏡で眺めています。また、実験手法のみならず、講義や輪読会、ミーティングの内容もはじめはチンプンカンプンでした。追い討ちをかけるようにどっさり英語の論文を頂き、途方にくれたこともありました。しかし、その都度先生方から説明していただき、(先生によると学生時代にも講義で言ったそうですが…) 徐々に話にもついていけるようになりました。いまは、英語の論文に対する拒否反応も徐々に薄まり、講義が楽しみになっています。そんなこんなで私なりに充実した日々を送っていますが、研修医や開業医勤務の道を選んだ友人との会話から、同期がどんどん臨床経験をつんでいくことに焦りを感じないわけではありません。自分自身、モラトリアムかなと思う時はあります。しかし、苦笑しながらも応援してくれる両親や熱心に指導して下さる先生方・先輩方に感謝しながら、欲張ることなく4年間、研究を思う存分してみたいと思っています。

大学院入学にあたって

口腔保健推進学分野 高橋 収



この4月より口腔保健推進学分野(旧称・予防歯科学講座)にお世話になっています。しかし、去年の今頃は自分が大学院に進学するとは思いませんでした。そもそも、進路について考えたことがなく、夏休みが明けてから「研修医で残るにしても、どこの科に行こうか。歯周病、義歯、それとも…」と悩んでいました。それが紆余曲折を経て、気がつけば予防歯科学の大学院生になっているのだから、人生はわかりません。まだ入学してから半年にもなっただけですが、研究

や臨床を通じて多くの方々と接し、勉強する機会を頂きました。今では自分の選択は間違っていなかったと信じています。何十年か後に職を退く頃には、さらにその思いを強くしていることでしょう。

大学院生になった一つの要因として、「私が生粋の新潟市民であり、自宅から自転車通学が可能である」ということが挙げられると思います。中学・高校が大学の傍にあり、「市役所近辺」に通学するようになってから十二支が一回りしてしまいました。出願したときは、12年間で16年間になっても大差ないだろうと思っていたのですが…甘かったかなあ。

市内の病院で産声を上げてから四半世紀が経ちますが、幸いにして私は乳歯・永久歯ともに1本もむし歯（齲蝕：うし）がありません。これは兄も同様のようです。両親は、ともに半ダースほどの歯が齲蝕になっているらしく、「子どもたちには、できるだけ齲蝕がないようにしたい」と思っていたそうです。かといって、特別な予防処置を

講じたわけではないので、「歯磨きをしない子」だった私が何故1本も齲蝕にならずに済んだのが自分でも不思議です。予防と名の付く科に所属しているのだから、遺伝や環境と齲蝕・歯周病予防との関係について調べてみたいと思います。

齲蝕がないということは、換言すると歯を削られたことがないということになります。学生同士でお互いの歯を削る実習の際も免除になり、同級生からは「患者さんの気持ちがわからない奴」と揶揄されていました（昨年、「腫れてからでは困る」と、口腔外科の先生にお願いして親知らずを抜いて頂き、ようやく削られる気持ちを知りました）。たしかに私は齲蝕の痛みを体験しておらず、同級生に比べて患者さんの気持ちに対する理解が不足しています。それでも、齲蝕があるよりは、ないほうが良いのではないのでしょうか。皆さんが齲蝕や歯周病等の疾患に罹患しないですむ、もし罹患しても早期にケアできる、そんなお手伝いができたら、と思っています。

